有明海沿岸低平地における景観・住環境イメージに関する研究

−居住者の属性に着目した比較検討−

A Study on Rural Landscape and Living Environmental Image in Ariake Reclaimed Lowland

- Compared study of residents Attribute -

○福井幹人＊[1]，後藤隆太郎＊[2]

FUKUI Mikito, GOTO Ryutaro

This study on rural landscape image are conducted in order to clarify how to recognize its living environment on residens in Ariake reclaimed lowland. The results are as follows: (1) The important landscape elements on residens are "sea and tidal flat", "field", and "waterways ". (2) Former residents especially regard "Waterway" and "People's activities" as important, because they have the experience of relating to those elements. (3) In the future, people want to improve of the sea, waterways, local image and sense of the season, in addition, people want the living environment with nature and residential neighborhood.

キーワード：景観イメージ、住環境、田園地域、居住者属性、有明海沿岸低平地

Keywords: Landscape Image, Living Environment, Rural District Area, Residents Attribute, Ariake Reclaimed Lowland

１．はじめに

有明海沿岸部は干潟の干拓等による長年の土地造成とともに、広大な農地および集落や村落などといった居住地がつくり出されてきた。元は海や干潟であったが故に、標高 0m から 3m 程度の極めて起伏の少ない広大な土地やそれを支える水路網が展開し、ここでの風景や景観は平坦かつ湿潤な低地であることが基本的な特徴といえる。

このような平地や低地に関して、樋口忠彦が「盆地や谷、山の辺のもっていた豊かな景観を、たとえ人工的であろうとも、何らかの形で代償し、（中略）平地においてこそみいだされあるいは生み出された中流・下流河川や農業水路や堀や遊水池の景観を保護し、生かしていく方策を早急に考えるべきではないか」[1)] と指摘するように、平地や低平地の景観や住環境に関して、さらに豊かな環境を生み出し、働きかけゆく余地が残されているといえるであろう。加えて、この種の田園地域では農業の大規模化や合理化を目的とした耕地整理等により農地、水路、道路の再整備に伴う、広大な土地の均質化が進んでおり、また、少子高齢化の進行や非農家の割合の増加など、田園地域であるにも関わらず空間的、社会的な課題が認められる。

これまで、景観イメージに関して特に都市部等において数多くの研究がなされているが、すでに様々な

図１　芦刈町の立地環境

*1　佐賀大学大学院工学系研究科博士前期課程　Graduate student , Dep. of Civil Engineering and Architecture , Saga Univ.

*2　佐賀大学大学院工学系研究科准教授・博士（工学）　Assoc. Prof. , Dep. of Civil Engineering and Architecture , Graduatte School of Science and Engineering, Saga University , Dr. Eng.

人々が暮らす田園地域の居住者属性に着目し、平坦で広大な低平地における景観・住環境イメージを明らかにしようとしたものはない。本稿では、低平地における現在の田園地域を人々はどのように捉えているのか、つまり低平地における景観・住環境イメージを明らかにし、また、その景観・住環境イメージはどのように動きつつあるのかを通じて、今後の景観・住環境等のあり方に関する基礎的知見を得ることを目的とする。特に、田園地域といっても現在は様々な人々が生活することから、世代や生業、居住履歴等を含む所属グループや世代等の居住者の属性に着目して整理分析を行うこととする。

２．研究対象および調査の方法

２．１　対象とする小城市芦刈町

本稿では低平地の田園地域である小城市芦刈町（人口6,111 人（H17)、世帯数 1,678（H17)、面積 1,667ha）を対象とする（図１）。芦刈町は有明海湾奥部に位置し、南は干潟海岸および有明海に面し、東西は感潮河川にて区切られ、北は牛津町に接している。町全域は干潟の開墾や干拓等により長年積み重ねられてきた造成地であり、その広大な田園地域に集落が点在する。かつては複雑に入り組んだ水路（クリーク）網等がこの土地の履歴をあらわしていたが、昭和 40 年代から 50 年代にほ場整備事業が行われ、集落居住域を除くほぼ全域において直線的な田畑や農道、用排水路により面的かつ大規模な再整備がなされている。

ほぼ全域が農業振興地域であり、加えて有明海での海苔養殖等、農漁業（第一次産業の構成比 25.2％) を特徴とするが、近隣市町等に勤める第三次産業従事者が過半（52.2％）を占める。また芦刈町は周辺３町と合併して小城市となっているが、周辺に対する芦刈町の高齢化（高齢化率 26.3％）や活力低下が課題とされ、地元購買率向上、交流人口増、居住者人口増をめざすまちづくり交付金事業に取り組むなど、住環境整備等も行政的課題となっている。

２．２　景観・住環境に関するアンケート調査

このような芦刈町の景観・住環境について、アンケート調査（2008 年 10 月 -2009 年 1 月、及び 2010 年 6 月）を実施した。本稿では、居住者の属性を分析軸とするため、調査対象とするグループとして、芦刈に 27 ある区（集落) の代表で構成する【区長会】（回収 15 名)、及び、農業を含む一般的な居住者のグループとして芦刈中央部の一集落である牛王の【牛王地区住民】（回収 35 名)、また、非農家や非漁家の主婦を中心とする【婦人会】（回収 19 名)、さらに、海苔養殖業を従事する芦刈【漁協青年部】(回収 12 名)、さらに、かつて芦刈町の住民であった関東在住者で構成する【芦友会（町人会)】（回収 13 名）を取り上げ、各グループごとに調査を実施した。なお、各グループごとの世代等の属性を表１に示す。

以下では、景観・住環境イメージに関わるアンケート調査の設問ごとに、上記のグループ別および年代別に整理し、アンケートの集計結果に加え、適宜自由記述を踏まえながらそれぞれの項目について傾向を示していく[2)]。

表１　アンケート回答者の居住者属性

グループ	総数	性別		出生年				居住地域			
		男	女	昭和1～19年	昭和20～39年	昭和40～59年	不明	芦刈北部	芦刈中部	芦刈南部	不明
芦友会	13	11	2	7	6	0	0	7	4	2	0
区長会	15	15	0	9	4	0	2	9	3	3	0
牛王地区住民	35	28	7	10	15	4	6	0	35	0	0
婦人会	19	0	19	0	16	1	2	7	4	7	1
芦刈漁協(青年部)	12	12	0	0	0	12	0	1	3	8	0
計	94	66	28	26	41	17	10	24	49	20	1

３．低平地の景観・住環境要素について

まず、芦刈町に暮らしている人々はどのような景観要素を大切と捉えているのか、抽出提示した 15 要素（３つまで選択可）の集計結果および具体的な記述内容について整理する（図 2、図 3、表 2)。

３．１　低平地の景観・住環境要素：グループ別

全体的傾向として「海・干潟」「田畑」「水路」は大切な要素として多く選択され、次いで「人々の営み」が多く選択される。

グループごとの特徴（図２）として、【芦友会】は「水路（クリーク)」と「人々の営み」が比較的多く選択する傾向にある。自由記述（表２）でも「クリークで泳いだり釣りをした」という経験や相撲大会や沖ノ島参り、字田継走リレー、面浮立、堀干しなど「人々の営み」を感じさせるような記述があった。また、他のグループと比べて「海・干潟」がやや少ない一方で「山々」「社寺」が選択されている。

【区長会】は他のグループと比べて「堤防」が多く選択され、「人々の営み」の選択はやや少ない。

【牛王地区住民】は特徴的な傾向はあまりみられないが、記述では「平坦でのどかな景観」「田舎ということが大切」「夜の星空がきれい」など様々な意見があった。

【婦人会】は「海・干潟」「田畑」に選択が集中している。記述でも「ムツゴロウ」や「干潟」に関するものが多く見られた。

【漁協青年部】は「海・干潟」「田畑」「堤防」などに選択が集中している。

３．２　低平地の景観・住環境要素：世代別

世代別(図３)においても全体的傾向として､｢海･干潟｣「田畑」「水路（クリーク)」「人々の営み」が多く選択される傾向にある。

年配世代(昭和元年～ 19 年生まれ)の特徴として｢海･干潟」に次いで「水路」がより多く選択され、中堅世代(昭和 20 ～ 39 年生まれ）では、「田畑」が「海・干潟」と同等に多く選択される。これらの世代では、全体的に選択の多い要素の他に「山々」「道路」「社寺」などの要素にも少なからず選択があるが、若手世代（昭和 40 ～ 59 年生まれ）は「海・干潟」「田畑」「堤防」などにやや集中する傾向が見られる。また、若手世代になるにつれて「水路（クリーク)」の選択率が減少しており、年配世代のように水路での体験の少ないことが影響してい

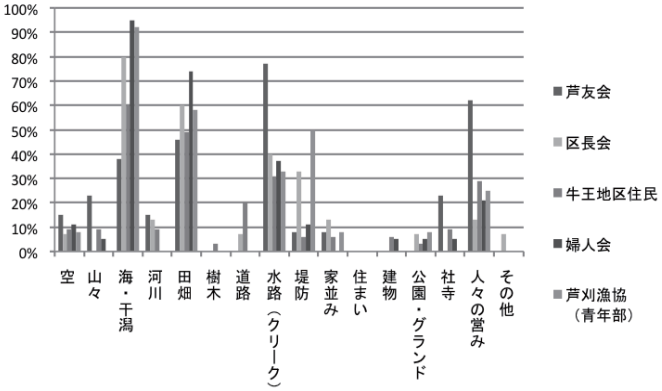

図２　大切な景観要素（グループ別）

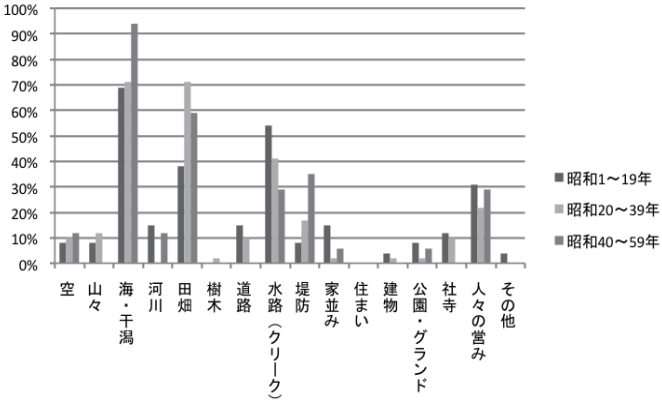

図３　大切な景観要素（世代別）

表２　大切な景観要素：主な自由記述の内容

芦友会	広々としている海、干潟 泳いだり、鮒釣りができたクリーク 天山から雲仙岳までの山々の景色 乙宮神社の相撲大会や沖ノ島参り、字田継走リレー
区長会	広々とした田畑 クリークや河川 堤防に樹木、秋の紅葉
牛王地区住民	平坦でのどかな景観、海・干潟、田畑 田舎ということが大切 天山の雄大に見える景観 夜の星空
婦人会	ムツゴロウと有明海の干潟 昔からの田園風景 夏の入道雲、広い海、穀倉地帯での平野 何も無い、不便さもまた魅力
芦刈漁協（青年部）	海、干潟 干潟に飛び跳ねるムツゴロウ

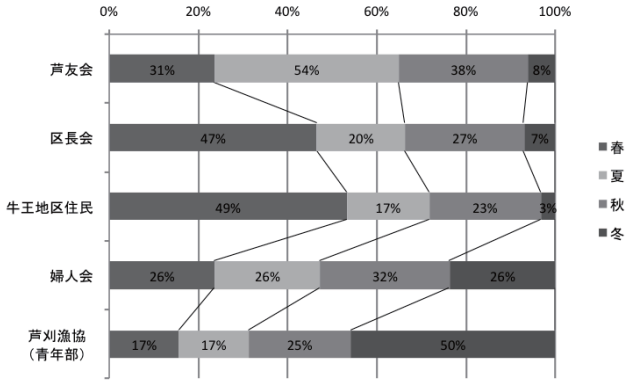

図４　魅力的な季節（グループ別）

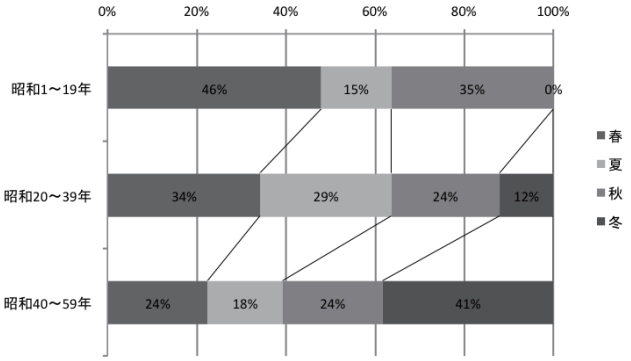

図５　魅力的な季節（世代別）

表３　魅力的な季節：主な自由記述の内容

芦友会	春／御田祭、レンゲの花や菜の花 夏／泳いだり、釣りをした海や川、神社祭り、夏祭り 秋／稲刈、面浮立、堀干し
区長会	春／ムツゴロウ、沖参り 夏／平坦部での田の緑 秋／秋の稲穂の黄色と空の青 冬／雪の積もった一面真白な田畑
牛王地区住民	春／桜の花、草花の咲いたところ 夏／祭り、沖ノ島参り 秋／稲穂、田園（黄金色一色）
婦人会	春／平野の麦の黄金色一色 夏／田んぼに田植え、干潟のムツゴロウ 秋／稲刈りの時期、町の動きや音、バルーンの飛来
芦刈漁協（青年部）	夏／夏祭り 秋／海苔の季節の始まり、米の色が変わる 冬／海苔摘み、海苔船、色とりどりの海苔網

るものと考えられる。

４．低平地における季節について

芦刈町の景観について、季節ごとの特徴や魅力があるのではないかと考え、魅力的に感じる季節とその具体的な記述内容を整理する。（図４、図５、表３）

４．１　低平地の季節：グループ別

全体的傾向として各グループごとにばらつきがあるが、「春」「夏」「秋」「冬」がそれぞれ選択されている。

グループ別の特徴として、【芦友会】は「夏」を半数以上の人が選択し、自由記述に、かつて海や川で釣りをしたり、泳いだ経験を挙げるものがあった。

【区長会】と【牛王地区住民】は「春」が比較的多く、田畑の緑や植物（桜や菜の花など）の咲き誇る季節として「春」を記述するものがあった。

【漁協青年部】は職業とも関わる海苔摘みの季節である「冬」を多く選択しているが、他の季節の選択もされている。また、海苔の始まりと米の収穫時期を重ねて秋を魅力的とする記述があった。

【婦人会】はどの季節もある程度均等に選択することが特徴であり、田んぼの季節ごとの景観の移り変わりが魅力的とする季節をまたがった記述もあった。

４．２　低平地の季節：世代別

年配世代は特に「春」と「秋」を多く選択する傾向にあり、「冬」の選択は無い。中堅世代は選択がばらつく傾向があり、若手世代は「冬」の選択がやや多い。また、「夏」や「秋」はどの世代にも選択される傾向にある。

５．景観・住環境の変化について

ここでは、芦刈町の景観は昔と比べてどのように変わったのか、「変わっていない」［良い方向に変わった］「悪い方向に変わった」［わからない］の項目を設け、人々の景観の変化に関する捉え方について、その理由としての自由記述を踏まえて整理する。（図６、図７、表４）

５．１　景観・住環境の変化：グループ別の分析

全体的傾向として選択にばらつきがある。

【芦友会】は「変わっていない」がやや少なく、「良い方向」・「悪い方向」どちらかに「変わった」の選択がほぼ同数である。

【牛王地区住民】は「良い方向に変わった」と答える人がやや多い。地区周辺において実施されてきた道路や施設整備が評価を上げる一因になっているのではないかと考えられる。

【区長会】は「変わっていない」が多く、次いで「悪い方向に変わった」が多い。その具体的記述として、農薬の流入や水路（クリーク）に生えていた葦がなくなり、水が汚くなったことが理由として挙げられており、かつての川や水路（クリーク）を知るグループは今日の川、水路の水質を評価しているものと考えられる。

【婦人会】と【漁協青年部】は「変わっていない」「わ

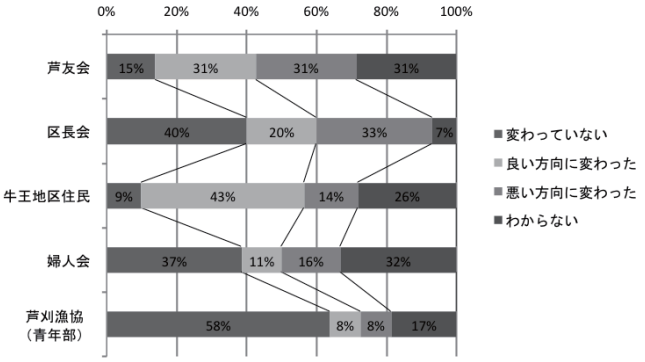

図６　景観の変化（グループ別）

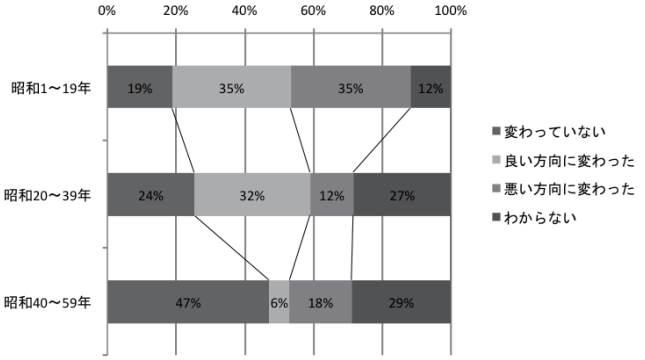

図７　景観の変化（世代別）

表４　景観の変化：主な自由記述の内容

	良い方向に変わった	悪い方向に変わった
芦友会	・道路やクリークの整備 ・道路が格別に良くなった	・農薬が流入、クリークでの釣りや堀干しが今では不可能 ・ほ場整備事業で旧堤防がなくなり、堀が狭くなった。視界を遮るものが何もない広大な平野が広がった
区長会	・時代の流れにより交通量も増して道路整備が進んだ	・クリーク、川が汚れて水が汚い ・マナーの問題、人と人との繋がりが薄い、時代が悪い
牛王地区住民	・道路（歩道）や公園の整備 ・ベッドタウンになってきた	・人柄・時代 ・行政が何を重点に考えているのかわからない
婦人会	・道路が便利になった ・のんびりしていた所が良かったが、広い道路ができて、そのために地域が分かれる	・町に住んでいる人々が以前より減ったことと、活気が無くなってきたこと、町全体がさみしくなった ・クリークに生えていた葦等が無くなり、水が汚くなった
芦刈漁協（青年部）		・自然が無くなって子供の頃みたいに基地ができない ・水が汚くなった

からない」を比較的多く選択する傾向にある。

５．２　景観・住環境の変化：世代別の分析

世代別でみると、年配世代は「良い方向に変わった」と「悪い方向に変わった」と景観の変化に関する評価が二つに分かれる傾向がある。

中堅世代では、「変わっていない」「わからない」がより増えるが、「良い方向に変わった」とする人がやや多く、若手世代では「変わっていない」「わからない」が大部を占める。

以上のように、グループ別、世代別で評価に差異があることが特徴であり、特に道路整備やほ場整備事業（農地、農道、クリーク等の再整備）等に対する景観的な評価として「良い」「悪い」「わからない」とそれぞれの捉え方が併存するものといえる。

６．これからの基盤・景観整備について

これから芦刈の景観をより良くするためにはどのような改善、保全整備が必要であるか、図に示す項目を設定し（三つまで選択可）、それに対する回答結果を整理する（図８､図９）。なお､以下では項目ごとに､グループ別、世代別の傾向を踏まえて、基盤・景観整備に関する人々の認識や意向についての傾向を示していく。

全体として「有明海や干潟の保全」「河川や水路の保全」、次いで、「イメージ」「四季」を多くの人々が必要とする傾向が認められる。「有明海や干潟の保全」は若手世代の方が年配・中堅世代よりも多く、「河川や水路の保全」は年配世代においてより多く必要と認識されている。「イメージ」については、グループごとにばらつきがあるが各世代ともに少なからず必要と認識され､「四季」については【婦人会】や中堅世代においてやや多くの人々が必要とする傾向がある。以上の海や河川・水路といった低平地を成立させている基盤的なものとともに、地域のイメージや四季といったやや抽象的な景観の保全や整備等がより重要視されているといえ、このことは３章や４章の結果とも符号する。

その他の項目として「田畑や農道」「堤防」「道路緑化」のような基盤や施設の保全や改善も必要と認識されるうる項目といえるが、「山への眺望の保全」は【芦友会】の一部、中堅世代の一部が選択する程度、「歴史」についても一部の選択にとどまっていることから、低平地の遠景としての山並みや歴史的なものの保全等は、ここの人々にとっては必要とはされにくいものといえるであろう。

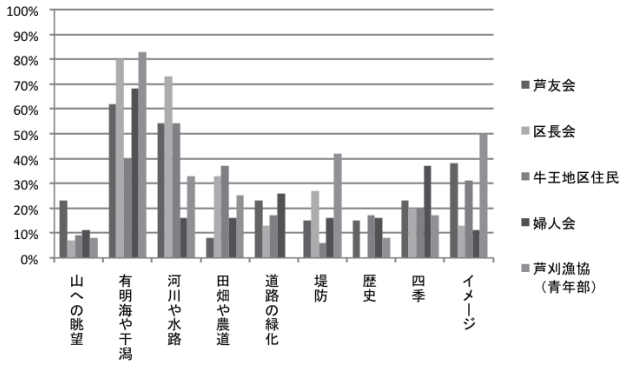

図８　これからの景観整備（グループ別）

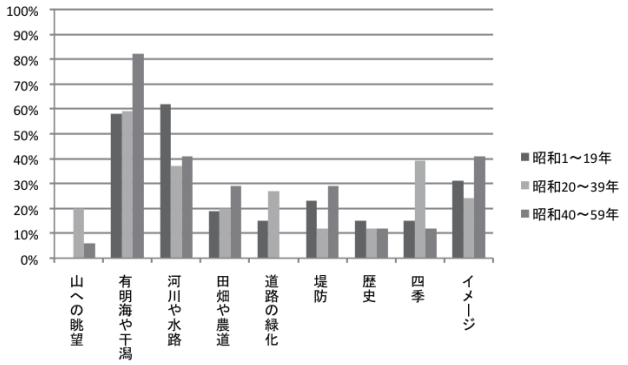

図９　これからの景観整備（世代別）

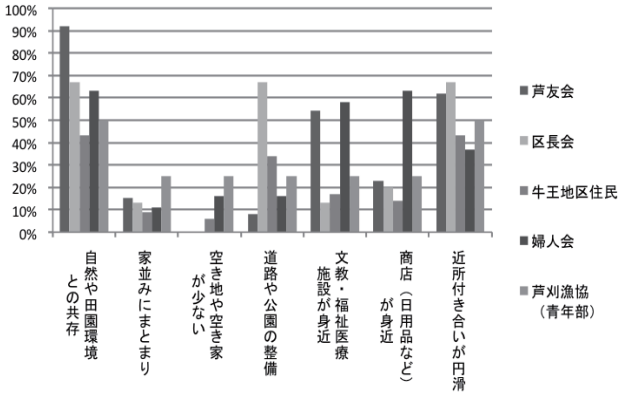

図１０　これからの家並みや住環境（グループ別）

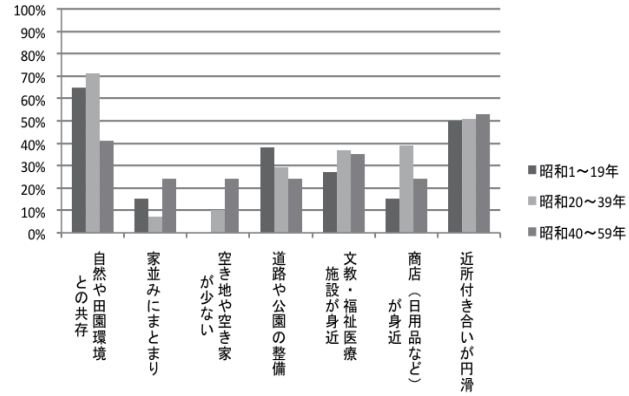

図１１　これからの家並みや住環境（世代別）

７．これからの家並み・住環境について

現在の住民が芦刈で住み替えるならばどのような住宅地環境が良いか、もしくは旧住民がこれから芦刈で暮らすならばどのような住環境が望まれるのか、図に示す項目を設定し（三つまで選択可）、それに対する回答結果を整理する（図 10、図 11）。なお、以下では項目ごとに、グループ別、世代別の傾向を踏まえて、家並み・住環境に関する人々の認識や意向についての傾向を示していく。

全体的傾向として、「自然や田園環境との共存」と「近所付き合いが円滑」を多くの人々が必要とする傾向が認められる。特に【芦友会】は「自然や田園環境との共存」を必要とする傾向があるのに対し、【牛王地区住民】や若手世代は他の世代と比べ、必要と認識される傾向が弱い。「近所付き合いが円滑」においては、グループ別では各グループごとで差がみられるが、世代別では各世代の約半数が選択している。

「生活道路や公園の整備」については【区長会】や年配世代が特に必要と認識し、「文教・福祉医療施設が身近」及び「商店（日用品など）が身近」など、生活の利便施設を【婦人会】や各世代に少なからず必要と認識されている。その一方で、「家並みにまとまり」や「空き家・空き地が少ない」のような視覚的、物的な居住地の景観に関する項目は必要と認識されにくいものといえるであろう。

８．まとめ

有明海沿岸低平地の景観・住環境イメージの特性および今後の景観・住環境のあり方に関して以下のことが指摘できる。

①大切な景観要素として、特に多くの人々が認識するものは、低平地の空間基盤といえる「海・干潟」「田畑」「水路」、及び、そこに展開する「人々の営み」といえる。その中で、関東在住の旧居住者（【芦友会】）は、かつての遊び等を通じた「水路」、地域の祭り等の「人々の営み」のような生活体験とともにある要素を特に大切にする傾向があり、このことは現住者が今後の地域の景観を考えるうえで示唆を含む結果といえよう。加えて、土地の形成や存続に欠かせない「堤防」が一部において大切な要素とされ、次いで属性による差はあるが「道路」「社寺」「河川」「山々」「空」も人々に大切と認識される景観要素といえる。

②魅力的な季節は、一つに限定されるのではなく、春、夏、秋、冬、それぞれに魅力的なものがあることが確認できた。特に芦刈町には農業と漁業、つまり平野の田畑、海・干潟における二つの生業と関わる季節の景観があり、それらは時間的な移り変わりを含むことも特徴といえる。

③景観の変化に関する捉え方について、若手世代や女性（【婦人会】）は「変わっていない」「わからない」が多いが、年配世代などは「悪い」「良い」と評価が分かれる傾向があり、主に道路整備やほ場整備事業等に対する景観的な評価が一定ではないことがその背景と考えられる。また、今後の整備について「海・干潟」「河川」「水路」の保全・整備を多くの人々が必要と認識しており、次いで、グループ毎に差はあるが「イメージ」や「四季」も少なからず必要とされ、次いで「田畑や農道」「堤防」「道路緑化」もおおむね必要と認識されている。

④さらに、これからの家並みや住環境について、「自然や田園との調和」と「近所付き合い」が強く求められることが特徴であり、グループ毎に差異があるものの「商店」や「文教・福祉」等の利便施設、「道路・公園」も少なからず求められている。その一方で、「家並みのまとまり」を求めるのは若手世代などのごく一部となっており、このことは、上述の大切な景観要素として「家並み」「住まい」「建物」「公園」「樹木」がほとんど認識されていないことと合わせて、一般の市街地等とは異なる低平地の傾向といえるであろう。しかしながら、居住収縮等の認められる低平地の田園地域において、この種の認識の弱さがむしろ課題であり、集落等の住環境の維持・更新や新たな居住者獲得のためには個々の物的要素を含む家並みや住環境を重視することも必要といえるのではないか。その詳細については今後の研究課題としたい。

謝辞

本研究を進めるにあたり、アンケート調査実施にご協力いただいた小城市役所芦刈庁舎まちづくり推進課、アンケート調査にご協力いただいた各団体の方々に大変お世話になりました。ここに記して、感謝の意を表します。

参考文献及び注

１）樋口忠彦「日本の景観」,ちくま学術文庫,1993 年（同書,春秋社,1981 年初出）、特に P.185 ～ P.186 を参照。

２）今回の対象とした一部のグループは被験者数が 12 ～ 13 件と少ないものがあるため、自由記述も併用して分析を進めていくものとする。尚、自由記述はすべての意見が反映されるよう整理した。